

＜平成26年度長岡大学COC事業・調査研究成果＞

田村文吉の足跡と活動 再考

—長岡地域の産業史・企業家史に関する資料(Ⅱ)—

長岡大学教授 松本和明

はしがき

筆者は、本誌『地域連携研究』の第1号（2014年11月発行）において、北越製紙株式会社（現・北越紀州製紙）の経営発展と企業成長を1910年代から60年代初頭にかけて旺盛に主導した田村文吉（1886～1963）の企業者活動および地域・社会貢献活動について、諸資料を収集して分析を加え、ひとつおり明らかにすることができた。

引き続き、長岡地域はもとより新潟県内外から関係する資料を収集している。そこで、本稿は、新たに収集できた資料を紹介し、解説ないし解題を付して、田村文吉の足跡および事績をより多面的に跡付けることを課題とする。

なお、史料は、読み易さに配慮して、適宜句読点の付加、段落分け等をおこなっていることをお断りしておく。

I 講演録「我が社の歴史と産業報国」

【資料Ⅰ】は、田村文吉が北越製紙の設立までの経緯と事業展開の過程および今後の方向性について講演したものを採録したものである。原史料には、講演日時・場所等は一切記載されていない。内容等から推定してみたい。タイトルにある“産業報国”から考えていこう。北越製紙は、1939（昭和14）年以降の産業報国運動の高揚を受けて、長岡工場・ファイバー工場および本社（全て長岡市蔵王町800）で1925（大正14）年4月に従業員の親睦団体として創設された星親会を40年6月に産業報国星親会へ改組している（北越製紙株式会社北越製紙百年史編纂委員会編『北越製紙百年史』北越製紙株式会社、2007年）。同会の会合で講演をおこなった可能性が指摘できる。一方、北越製紙加

工販売の設立が1938年、同社の北越紙業への改称が39年であるので、この時点は1940（昭和15）年とみるのが妥当である。つまり、1940年に、産業報国会星親会の創設以降、同会で講演されたものと推察できる。

文吉は、明治維新直後の北越戊辰戦争で焦土と化した長岡の復興のプロセスをふりかえったうえで、創業者である実父の文四郎と覚張治平の起業構想と北越製紙としての設立、長岡をはじめ新潟・市川工場の新設とそれぞれの増設、板紙から洋紙・ファイバー等への多品種化、抄紙機をはじめとする諸設備の拡充、販路の開拓と販売状況、資金調達や子会社の創設、他企業の合併・買収およびトップマネジメントのメンバーの変遷など、経営の諸側面を時期ごとのトピックスを中心に述べている。事実関係はほぼ間違いがなく、懇切かつ丁寧の説明していることが読み取れる。文吉は1915（大正4）年に支配人として入社して以来、営業部長と長岡工場長も兼任して実務の統括を担っており、それゆえ各事象のほとんどに関わっていたわけであり、子細にわたるのはもとより当然といえるが、機会を得て、会社設立以来30有余年の歩みを星親会会員である一般従業員に広く伝えて、これを共有しようと企図した文吉の姿勢は評価するに値しよう。内容については、事業が順調に推移していた時期以上に、不況期でかつ競争の激化や市況の下落が進んでいた時期、即ち厳しい経営環境の下において、企業としていかに対応し、いかに克服していったのかに関する箇所は立ち入った言及がなされており、危機意識の共有も意識していたと考えられる。

文吉の言動は、若い頃から基本的には冷静かつ沈着であったものの、戦時下でかつ産業報国会での発言であるため、その言説には時代ががっている箇所が散見される。文吉の人格をもってしても時節に翻弄されていたといえる。

こうしたなかでも、文吉は文四郎および覚張の創業の精神をはじめ、地域の発展への貢献や全社的な「一致協和」の重要性を強調しており、経営環境や時代状況の変化のなかでも終始一貫したスタンスないし方向性であり、文吉の企業家としての揺らぐことない理念ないし思想および事業姿勢は、現代にも繋がるもので、特筆すべきである。

文吉は、北越製紙の本格的な社内報として、1955（昭和30）年1月から刊行が開始された『北越ニュース』の第2号（1955年4月1日刊行）から第34号（1958年1月15日刊行）にかけて、自らの生い立ちと社歴を跡付ける「思いいづるまゝ」と題した回顧録を33回にわたって連載したが、本講演内容がベースの一つとなったと考えられる。

同資料は、北越紀州製紙株式会社の所蔵である。

【資料Ⅰ】

長岡の土地は戊辰の戦争で全部兵火の為に焼野と変りました。それまでは城下町で地方政治の中心地として相当賑つてをりましたが、此の為に住民は右往左往散々になつて、如何にして再興するかについては有識者の間で悩みつゞけました。明治四年廃藩置県の事がありまして、禄を離れたお士さんは貰つたお金で酒店を開くものあり、呉服物を売る等商売を始めたものでありましたが、慣れぬ仕事の為に多くは失敗に終り、随分悲惨なものでした。此の時に当り長岡の先覚者である小林虎三郎氏（病翁）だとか三島億二郎氏などの人が将来に人材を育成して長岡発展の基礎を築かねばならぬとし、当時可成反対する人もありましたが、「我々は今喰へぬのだから学問を奨励しなければならぬのだ」と主張して、明治五年長岡洋学校を設立し、「善い先生を頼むには報酬を余計出すのは当たり前だ」といつて高給を払つて英語の教師を入れる等、所謂長岡の「建直し」の為に挺身努力されました。長岡が今日の殷賑あるは、実に之があつた為であります。

又一旦商売に失敗した人達も再建の意気を以て乗り出し、長岡に買ふ人が無ければ地方へ行商しやうといふことで商品を背負つて出商ひをしました。

これは当りまして、追々富を成すやうになりました。殊に小林病翁から算用数字を習つた事が役立つて、反物仕入れにヤールが解り大へん都合がよかつた等の逸話が残つてをります。明治二十年の頃から東山油田の開発の事があり時々噴油がありましたので、長岡経済

界の活気は頗る挙つて参りました。此の為に長岡人士は相当富を成したものです。宝田石油会社が小会社を合併して斯界に覇を成すに至りましたのも此の時分です。

その内に明治三十七年八月日露戦争が勃発し、初の一箇年位は経済界も沈静状態でしたが、戦後漸く景気がよくなり、長岡の商界も俄然活気上昇し、企業創始には絶好の機運を生じました。

明治三十八年六月に北越水力電気株式会社が創立され、電力の供給の事がありまして、之は工業発展への実に生みの親ともなるものでした。

私の父に当ります当社初代専務（故田村文四郎翁）は仕事好きな人で、早くから抄紙業を企図されました。長町の今の私の邸に清き水が湧出しましたので、小仕掛けでしたが紙抄きを創められました。然し之れでは満足が出来ませんで、何とか大規模なもので創めたいものと二六時中考へてをられました。

そこで前にお話致しました通り、財界も建て直り企業熱も相当加はつて来た好機を逸さず、且つ長い間の念願でありました長岡地方の産業の開発進展に寄与したいものと当時銀行の重役でありました覚張治平さんとも語り合ひ、山田又七さん、渡辺六松さん、山口達太郎さん、小川清松さん、渡辺藤吉さん等とも御相談し、又東京の大橋新太郎さん、山本留次さん等の御応援を得て、愈々会社を建てることになつたのであります。

さりながら、多額の資本を集めて無経験の新事業を興す事は中々容易のものではありません。

其の機械の一部たりとも熟練職工の一人たりとも、総て之を他に求めねばならぬのであります。

畢竟、田村・覚張両氏等の平常石橋を杖で叩いて渡ると言はれた堅実さに対する信用に依つて、此の事業の成立を見るに至つたものであります。

かくて、明治四十年四月二十七日資本金七十五万円払込四分の一を以て、我が北越製紙株式会社は長岡に於ける最初の近代的大工業として呱呱の声を挙げたものであります。そこで工場用地を長岡の蔵王の地に卜し、用地八千五百余坪を買入れ、建築主要物は明治四十一年四月に落成したのであります。

機械は八十四吋丸網式、ドライヤー二十一本とし、之にスクリーン・ジヨルダン等を加へて、高田商会を通じてブラック・クロウソン会社へ注文し、蒸釜は二個を大阪前田鉄工所に、ピーターも二台大阪の旭鉄工所に、ボイラーは新潟鉄工所に、電動機類はシーメンスシユケルト支社へ夫々注文したのであります。当時

優良なる技師を得る事は最も困難とする処でありましたが、達腕春日馬之助氏を招聘することが出来たのであります。現在常務取締役新潟工場長の小林宗作氏は当時蔵前高工卒業当時でありましたので、春日氏の助手として働かれました。現経理部長の星野量平氏の入社されましたのも此の当時でありました。

そして、明治四十一年の十月社祖御胸像の付近で開業の式を挙げたのであります。私は当時修学中でありましたが、冬休みなど早く帰郷して父の手伝をして帳簿の整理などしたことがあります。往時を追想して、感慨深いものがあります。

明けて四十二年一月六日の払暁、忘れもしませぬが、藁切場付近から出火して折柄新築したばかりの建物を焼いてしまったのであります。会社首脳部の苦悩は実に想像外でありました事でせう。然し、従業員一同の不眠不休の努力と大工小林幸三郎氏の義侠的奮闘で、僅か四十日間で復旧再建の工を竣り、而も精選場などは前よりズツと改良されたやうの訳でした。

然し、それから六年の間といふものは、文字通り苦境時代でした。即ち、作つた板紙は当時何んだ彼んだと苦情をつけて一向に売れなかつたり、又少し儲があると他会社が真似て作り出したりして、販売を円滑にすることは非常に困難でした。当時我が社の開業と前後して山陽板紙の開業があり、岡山も一台北越と同型のを岡山に新設し、富士でも加島工場に一台増設しました等の為め、全国の板紙生産額は忽ち二千五百噸にも達し、当時一手販売を引受けてゐました日本洋紙会社としても到底之を売り切れないばかりか、滞貨はやがて五千噸にも達し、惹いては各社の引取量に対しても代金の支払ひが出来なくなつて来ました。此の間、美作製紙を買収する案や北越からは製造制限の案等も持ち上りましたが、斯うなると何れも物に成らず、日本洋紙も遂に其の維持困難となりました。従つて新設会社の悲しさには販売地盤もなく、製品の評判も一般に認識されてゐませんから、サツパリ販途が塞つた状態になつたのであります。

致し方ないので、我が社は断然直接販売を開始する為め東京神田神保町に出張所を設けることになりました。然し之も一時小康を得たといふことに止まり、此の為め日本洋紙を始め各社は非常に損害を来し、此俣に放置すれば各社自滅の外なきに至りましたので、各社は再び相寄り板紙共同販売所設立の議を進めることになつたのであります。

之も種々の支障が続出致しましたが、明治四十四年九月に至つて、漸く資本金二十五万円、東京板紙・富士・北越・岡山・美作・西成の六社各出資して其の設立を見るに至りました。之に依つて一時業界は安全を得たかの觀がありましたが、成立当時加入しない会社があつたばかりでなく、翌大正元年同二年に入り新会社が續々計画、運転を開始し、各社能率は合計四千六百餘噸に及び、其の實際製造噸数だけでも加盟非加盟を合して三千噸、尚ほ此の後著しき増加を示すべき情勢でありました。

当時、需要は毎月僅に二千噸乃至三千五百噸に過ぎない状態で、実に前途多大の不安があつたのであります。而も、共同販売所成立当時各社の旧品五千噸がありましたので、之が一般売品と同時に市場に売出された為めに、之が一掃に至るまでの約一箇年半は各社の売行に多大の障害を来したのであります。

大正三年、第一次欧州戦乱が勃興し、一時経済上の不安から不景氣を来し、板紙の価格も下落の一途を辿り、共販時代一噸六十円内外のものが、大正四年夏枯期には三十八円には三十八円から最底三十三円といふ破格の安値を現出するに至りました。茲に於て、同年十一月全国板紙業者は大阪に会合して、数日に涉つて製造制限、共同販売を議する処がありましたが、遂に物にならず、悲境時代のドン底に蹴落されてしまったのです。又此の間当時信濃川は時々大洪水がありまして、構内も水で浸り、藁が濡れて用に立たなくなつた事も度々で、之も苦心の種でした。洪水の浸入を防ぐ為めに、工場の周囲に石垣を以て土堤を築いたのでありますが、今日でも其の土留石垣の残骸を見る毎に往時を追懐するのであります。

さて、私が当社に入りましたのは大正四年の九月で、当時支配人として勤務し、何かと仕事を委されましたが、時期が前申し上げましたやうに受難に受難を重ねてをりました時代でありましたので、責任を深く感じ、何とかして此の苦境を脱し、所期の目的を達成しなければならぬと真実苦勞をしたものでした。世界戦争は確かに日本に於ける経済界工業界の革命期とも称すべく、日本の工業は破天荒の一大躍進を遂げたのであります。たとへそれが為めに大正九年に始まりました恐慌を先駆とし、非常なる反動期に遭遇し、日本が嘗て味はなかつた不景氣を招来する因を為したにせよ、之れに依つて日本の経済界が世界に於ける位置に重きをなし、惹いて今日五年に渉る大なる支那事變を

処理し乍ら、尚綽々余裕を存して東亜新秩序の建設に邁進することの出来る経済上の実力の基礎を築き上げたことは何人も否むことが出来ないと思ふのであります。

吾北越製紙会社も明治四十年の創立から大正四年迄の八年間を第一期所謂創業時代とすれば、大正五年以降即ち戦時景気の抬頭期から大正十年迄の六年間は第二期膨張時代と申すことが出来ませう。

それ以後昭和七・八年までは整理時代とでも申してよいのであります。扱て前に述べましたやうに、大正四年の秋頃には板紙自由競争激烈を極め、一面滞貨の状況は工場内東京秋葉原を合せて約二千噸に達し、之れ以上の収容力は無くなり、加ふるに在来毎月三百噸を往来してゐました抄造力は俄然五百噸に達するに至りましたので、同年十二月に入りまして藁パルプを抄造し、続いて翌年一月まで白ボール厚画用紙を抄造しました。是れ蓋し白洋紙類がそろそろ景氣来を唱へ出した時流を利用したものであります。幸運にも又小西・松村商店等から買入れました曹達灰は百斤三円見当のものが、戦争が始つて独逸から薬品が入らなかつたため七・八円に暴騰し、其後には十五・六円にも奔騰しましたので、余分のものを売戻して巨利を得たことがありました。

当時板紙業界も亦漸く景氣来を示して参りましたので、一月限り白ボール類の抄造を止め、黄ボールに還しました。大正五年三月に入りますと、雜貨類の景氣に伴つて板紙の需要も増大し、価格も噸価四十円から五十円に昇り、白洋紙の方では模造紙が一躍一聴十五・六錢にも達して非常の恩恵を喚起し、遂には製紙連合会は三月に入り最高値を限定して発表するに至りました。四月に入りますと一般の財界に行過ぎの反動が起り、模造紙は又十錢見当に板紙も四十五円までに低落しました。然し、其の年の秋口に入りますと諸物価再び騰勢に転向して、爾来六年七年と狂騰を続け、七年十一月休戦に至るまでは夏枯も不需要期もなく、板紙の如きは最高噸価百八十円を唱へ、模造紙も一封度四十八錢を唱ふる等全くの熱狂的値段を現出するに至りました。船舶なども平素は一噸五十円位のものが此の頃はボロ船でも一噸千円を叫ばれたのでした。

私共も、此の絶好の好機を逸してはならぬと鋭意努力、研鑽を払ひ、社業の発展を期しました。曩に板紙抄紙を開始した北越板紙会社は、大正五年白洋紙製造の準備を整へ、包紙中質印刷紙オカメ、万代印等の抄造を開始しました。

当時の自給原料はボロと藁だけで、それに初めての経験でありましたので、六十七吋四六判菊判とり合せて月産漸く二十四・五万封度でありましたが、それでも充分利益を挙げることができましたのも時勢のお蔭でした。大正六年二月臨時総会に於て北越板紙会社を買収合併し、北越製紙新潟工場と命名、之れが今日の新潟工場であります。

そこで四月同工場に原料自給の目的を以て碎木機四百馬力一台を新設し、グラウンドパルプを作つたものであります。之れ実に原料自給の端を為すべきものといふべく、我が社今日の発展を成す源であつたのであります。

翌大正七年七月には、百吋ヤンキーマシン一台（現在の二号機）を増設してロール紙・有光紙等を抄造するに至りました。引続き八年三月には、八十六吋長網抄紙機（現在の三号機）を増置して印刷紙・更紙の抄造を開始したのであります。又長岡工場では大正六年十一月中に機械各部及紙料部修理を行ふと共に乾燥筒十四本を増して三十五本とし、其の能率を月産六百五十噸に増加し、大正八年蒸釜一基を増設すると共に十一月中には六十二吋二号機を入れ、其の能率九百噸を突破するに至る等の発展を遂ぐるに至つたのであります。

市川工場の新設、扱て新潟工場の二三号機、碎木工場の増設、長岡工場の拡張等漸次発達を遂げて来て、遂に市川工場の新設とまで進展して行つたのであります。大正七年の春、私は初代専務について松戸・金町・市川と各候補地を物色して、実地に就いて調査して見たのでありますが、此の中で市川の地が付近に清流江戸川がありますので製紙上には最も良い土地と思ひましたが、唯此の川が海から塩水を上げやしないかと云ふ事を心配したのでしたが、専門家に調査させて見ました処、塩分は無いといふ事が証明されましたので、愈々此処に新工場を建てることに意を決したのであります。此の土地は曩に東京の某大立者が買つて種々文句をつけられ、遂に破談となつて日く付きの土地でありましたが、初代専務が真心を以て交渉したので、当時其の地方の有力者であつた寛貞蔵氏が認め「それなら御尽力ませう」と懸命に尽力をされ、遂に事なく此地の買収が済んだ訳です。人は真心が大切です。人を動かすものは実に誠です。

初め市川工場は板紙機械を据付ける予定でしたが、

其の計画を止めて上等印刷紙を抄造することに変更して建物の築造に着手し、八十六吋抄紙機一台を大阪の山沢鉄工所へ注文し、大正九年十二月に運転を開始したのであります。それから更に一台を英国ミルネ会社製のものを買入れ、大正十一年から之も運転を開始しました。何れも上等印刷紙及専売局納煙草口紙等を抄造したのであります。当時戦後景気落調に際会し、生産費の割高と相俟つて、同工場の採算はさして有利とは云はれませんでした、地方産業開発上には貢献するものがありました。

市川工場新設以後の事で未だに強く忘るゝことの出来ないのは、大正四年以来さしも旺盛なりし彼の戦時景気もゴム風船の遂に破烈する様に一大恐慌に直面しつつ、あつたことであります。大正七年欧州戦争の休戦条約成立と同時に船鉄等の国際商品から先づ大頓挫を来し、其後大正八年秋頃から再び所謂戦後の一景気を現出したのですが、愈々大正九年三月に至つて株式界を先駆に襲来した恐慌突風は実に樹を倒し岩を飛ばすの慨があり、あらゆる金融界も事業界も惨又惨、人心全く沮喪してしまひました。ですから市川工場新興の裏面にも並大抵でない苦汁を嘗めたものでした。即ち工場新設の為に約二百万円に近い資金を固定したことが、爾後数年間患ひを為し、資金の運用の為め容易ならざる困難を致しました。其の上各銀行からは借りた金は返へせ返へせと逼つて来るのであります。然し、能く此の難関を切抜け、別に暗礁にも乗り上げず、それでも各期相当の収益を挙げ得たのも是れ全く衆庶一致勤勉力行し、不撓の鉄石心で善処された先輩諸氏の努力の賜でありました。

漸く時局多難の秋に当りまして、洵に痛恨措く所を知らず哀悼の念を深からしむるものは、当社の創立者であり且創立以来夙夜精励刻苦され、社内から慈父の如く敬仰されてゐた初代専務田村文四郎翁が、大正八年九月かりそめの病に罹られたのが因となり、翌年五月十三日市川工場の運転開始を見ないで長逝された事でありました。然し乍ら、其の遺髪を受け継いで覚張常務さんが二代専務となられ、翁の令息豊太郎氏が新に常務取締役となり、茲に又陣容を改めて、此の難局打開に遭遇して行つたのであります。

禍は常に複数で来るものだと申しますが、次いで苦難に出遭ひましたのが、未だに記憶の生々しい彼の大正十二年九月一日の関東地方を襲ふた大震火災の惨事

に由因する財界恐慌時代であります。例のモラトリアムが発せられましたのも此の時です。之は銀行の支払制限令でありまして、事業家に取り実に大難関であつたのであります。会社も此の影響を受けまして非常な苦境に在つた訳です。第一回の社債を募集しましたのも此の時代です。昭和二年でしたか、僅か六十万円を興業銀行から借りるのに、私は何んと二十四回も足を運ばされました。然し、此間にありまして従業員一同は艱難に屈せず能く刻苦精励をしましたので、此の境地を突破して今日あるを致しました。此の際又哀悼の念に堪へませぬことは、二代専務覚張翁の逝去であります。株式払込金の徴収・社債の募集・増資の決行等当時金融界の難関を打開し、会社の行くべき途を誤らず、常に従容として事を処理されてゐましたのに、増資問題解決後病勢革り、遂に昭和二年六月十七日黄泉に旅立たれたのであります。

之は会社に取りまして一大損失であつたのであります。

尚ほ、翁に先立つて御令息覚張半四郎氏が御病死されてゐます。洵に重ね重ねの不幸でありました。そこで当時常務取締役であつた田村豊太郎氏が専務の職に就き、後任監査役には故山口万吉氏の御令息健造氏が就任され、支配人でありました私と故覚張翁の御令息義平氏が新に取締役にと就任したのであります。斯くして又陣容を整へて、社業所期の目的に向つて邁進して行つたのであります。

之が当社事業の所謂整理時代となるのでありまして、昭和三年十一月新潟工場晒設備完成し、其月第四号機増設に着手致しました。之は翌年四月運転を開始するに至り、跳躍的に更紙類の生産額を増加し、多数の新聞紙を供給することが出来ました。

尚、之と独逸フォイト社に最新式碎木機を注文して之を取付けたり、廃水を利用して著しく歩留を向上させたりしましたので、画期的生産費の低下を来しました。

昭和五年五月、私は欧米視察の為め渡欧する好機を得まして、各先進国の経営及生産状況並に従業員の生活状況等を具に調査視察をして、其の年の秋帰朝致しましたが、当社経営上に幾多の参考資料を齎した事を喜んでをります。

さて、生産工業の原動力たる電力の供給を円滑にし、且つ経済的にし、而も生産能率の増進を図る為め、自家用発電の計画を樹て、先づ市川工場に昭和五年発電

機を設置し、次いで新潟工場に設置し、昭和九年には長岡工場にも之を建設し、夫々開転を見るに至つたのであります。

其の他、長岡工場の第二号抄紙機乾燥筒を三段式に改造したり、市川・新潟工場両工場をも種々と改善刷新を図つて来ました。

昭和十一年七月四日、社長田村豊太郎氏の長逝に遭ひました。氏は資性敦厚恪勤社業の発展に孜々として尽くされましたが、本当に惜しい事を致しました。

幸ひ、重役さん方を始めとし、従業員一致和協して社運の進展に努めて来てをります。

満州事変後、ファイバー製出の事業を企画し、当初長岡工場に付属して工場を建て機械を入れ、昭和十年十一月から運転を開始したのでありますが、年を遂ふて其の製品の価値が認められ、従て生産額も増加して参りました。今や時局の波に乗りまして、金属・皮革・ゴム代用品として欠くべからざる必需品として其の地位を確保してをります。

最近の事は皆さん能く御承知の通り、昭和十一年十月小田洲炭鉱株式会社が設立され、専ら石炭の採掘販売を業としてをります。

昭和十二年五月には、北越パルプ株式会社が創設され、盛んに人絹パルプを製出してをります。更に紙及ファイバー加工製品の販売並に材料の仕入を目的として、一昨年北越製紙加工販売株式会社の創立を見るに至つたのであります。之れは昨年五月に北越紙業株式会社として改称され、広く一般紙類の販売をも付加されるに至りましたが、之等の会社は何れも兄弟会社として相関聯し、当社運の進展に寄与する所が頗る多いのであります。

尚、昭和十三年七月新潟板紙株式会社を合併し、更に昭和十四年八月太陽パルプ株式会社戸田工場を買収して、今や総資本金一千三百十五万円、新潟・長岡ファイバー・沼垂・附船・市川・戸田の七工場より生産する額は、年産板紙約七万七千噸、洋紙一億二千百五十封度、ファイバー約六百万封度、パルプ約六万噸となつてをり、販売先は内地各地の外、遠く海外に及んでをるのであります。

以上で大体我が社の歴史の概要を述べたのでありますが、我が社の今日あるのは実に社祖の御陰であります。即ち、当社を創立せられた故田村文四郎翁及故覚

張治平翁が鉄石の信念を以て時勢を先覚し、偉大なる人格と信用とを以て同志の協力を求め、堅実周到なる計画を樹て、専心事業を進められ、盤石の礎を築かれた其の御陰であると深く信じてをるのであります。而も、創立の当初から今日まで一貫してゐる社業の精神は、社祖から初め唯単に会社の利益を図るといふ事よりも、地方の開発、郷土の発展に貢献したいと云ふ事を重んじてをるといふ事であります。長岡・新潟・市川の各地方が我が社事業の爲め何の位其の地方の繁栄に影響してゐるかは申すまでもなく皆さんも容易に推知することが出来ると思ひます。而して従業員は上下一致和協して働いてをるのであります。是れがあればこそ、如何なる艱難に遭遇致しましても克く此の苦境を打破して、明朗性を覚醒せしめ、駿々として社業の隆盛を図つて来たのであります。

現時局は益々多端、未曾有の国難に直面してゐるのであります。何うぞ皆さんは、我が社の歴史を常に省みると共に、先輩諸士の奮闘されました努力と、我が社の終始一貫産業報国の為に尽瘁して来た精神を汲擷し、深き信念と決心とを以て一層の協力和同をお願いする次第であります。

完

Ⅱ 積雪科学館との関わり

田村文吉は、積雪が市民の生活を大いに苦しめていたのを憂慮し、雪を科学的に究明して災害を防除するとともに積雪の利用にも早くから興味・関心を抱いていた。こうしたなかで、長岡工業専門学校（現・新潟大学工学部）が積雪を科学的に研究することを目的に積雪研究所の立ち上げを計画した。これに対して文吉は賛意を示し、北越製紙から60万円相当の図書・資料・施設等の寄付をおこない、同研究所は1948（昭和23）年10月に発足した。

文吉は、積雪研究所を支援するにあたり、調査・研究のみならず啓蒙・普及等多面的な活動を構想し、これを推進するための財団法人の創設を計画した。北越製紙から基本財産として30万円、普通財産として10万円を提供して、48年10月に財団法人積雪研究会の設立を決定し、文吉が理事長となった。翌49年2月には、長岡工業専門学校から旧科学工業博物館の貸与を受けて、積雪科学館が開館した。初代館長には雪氷協会会員の勝谷稔が就いた。

積雪科学館の事業は、研究部と普及部から構成され

た。研究部による調査活動は、1949年に新設された新潟大学工学部および教育学部の研究者と密接に連携して進められた。普及部は、雪に関連する模型や民具および文献等を広範に収集し、内外の研究者はじめ一般市民の利活用に供した。これらの活動成果を地域に広く還元するために、一般向けの『積雪シリーズ』・『積雪パンフレット』、研究員による論文を収録した『積雪研究』をはじめ、新潟県内の小中学校の教諭および児童・生徒との共同調査による『新潟県積雪表』、『版画雪の国』等を毎年刊行している。

【資料Ⅱ-i】は、積雪科学館が毎年4ないし6回刊行していた『まどのゆき』の第13号(1956年10月15日発行)に掲載されたものである。1956年7月16日に、皇太子(現天皇陛下)が新潟県を旅行する中で長岡市を訪問し、積雪科学館を訪れた。文吉から同館について説明を受けたうえで、館内の展示物を観覧し、特に民俗資料や古文書には特に興味を示したという。また、科学教室に参加している児童・生徒たちとも親しく会話を交わし、激励した。

同史料は、文吉が積雪科学館の概要を説明するために纏められたものである。積雪科学館の目的や活動内容がもとより正確に記されている。特に新潟大学との共同研究や新潟県内小中学校との降雪量の共同調査、開館以来おこなわれ続けている科学教室、民具の収集が強調されていることが読み取れる。北越製紙をはじめ長岡市や新潟大学の支援を受けて運営されていることに言及しており、注目すべきである。同資料は、国立国会図書館所蔵である。

なお、科学教室は毎週日曜日に開催されていたが、12月最終の年末大会には、文吉は多忙を極める中でも必ず参加し、児童・生徒たちに北越製紙や田村商店等からのプレゼントを贈り、大いに励ました(『まどのゆき』第16号、1957年1月25日発行、長岡市立中央図書館所蔵)。また、長岡出身の作家の松岡譲は、新潟大学との連携や科学教室の開催を重要視するとともに、「多くの今出来の博物館に見られるように、そんじよそこの標本屋から買い集めて来て、それをただ陳列しているという、ありふれたものとは全く行き方を異にしている、どこまでも自分のところで実験して得た結果を発表する形をとっている」、「とにかく研究を踏まえての良心的な一風変わった博物館で、どこにもあるという駅弁式博物館ではない」(『雪の博物館』『まどのゆき』第24号、1958年4月10日発行、長岡市立中央図書館所蔵)と積雪科学館のスタンスないしそのあ

り方を高く評価していることを付言しておきたい。

【資料Ⅱ-ii】は、『まどのゆき』第4号(1955年1月1日)に掲載されたものである。文吉の幼少期の雪の思い出を率直に語っている。文吉はビジネスや政治あるいは教育についての論考を新聞や雑誌等に数々寄稿しているものの、幼少期の体験ないし経験を含むプライベートに関しては、北越製紙の社内報である『北越ニュース』を除くと多くを執筆しているわけではなく、貴重な作品といえる。幼少期の活発ないし行動的であった文吉の姿を垣間見ることができる。文吉は、幼少期について懐かしさを以って語りながらも、終盤では毎年変わることがない雪害を憂い、克雪を進展のためには政治的解決が必要であることを強調している。政治家としての活動の第一義として雪の問題に對峙し続けた文吉の揺るぐことない姿勢も読み取れる。同資料は、長岡大学松本研究室所蔵である。

【資料Ⅱ-iii】は、『窓の雪』第43号(1961年12月15日)に掲載されたものである。創設以来館長を務めてきた勝谷稔の功績を詳細にわたり叙述して、これを高く評価するとともに謝意を表した。また、新館長となった盛田英治に期待を示している。雪害対策については、文吉が積極的にコミットして1951年に積雪寒冷単作地帯振興臨時措置法、56年には積雪寒冷特例地域における道路交通の確保に関する特別措置法(雪寒法)を制定させており、文脈からは事態の改善への自負が見てとれる。この一方で、新潟県下は60年末から61年1月上旬にかけて豪雪に見舞われた(いわゆる「三六豪雪」)。これをふまえて、さらなる制度の確立および政策ないし施策の進展に向けて尽瘁すべきであると改めて強い決意を示している。なお、1962(昭和37)年4月には、議員立法によって、豪雪地帯対策特別措置法(豪雪法)が制定されたことを付記しておきたい。同資料は、長岡市立中央図書館所蔵である。

【資料Ⅱ-i】

積雪科学館の概要

田村 文吉

積雪科学館の経営者である積雪研究会理事長田村文吉、謹んで本館の概要を御説明申し上げます。

本館は昭和24年2月に創設されました。目的は雪国の生活を豊かにするための科学研究とその普及にあります。研究は主として新潟大学の教官に依頼し、行く

行くは新潟大学に付属した雪の研究所に発展することを期待し、大学当局もまた雪を対象とした総合研究をする機関とするために努めておられます。

研究の結果、学位を獲得したものもあり、特許を登録しそれが現に使われているものもあります。雪国の湿った空気の影響を調べるために小さい感部を持つ湿度計が必要であります。電気湿度計の研究により略その目的が達せられることが解り、学位が与えられました。特許を登録したのは雪上自動車であります。雪が積もると自動車は動かなくなります。それを動かすために接雪面と車体の重さとの関係を研究し、雪の中にもぐらない雪の上を駆動する研究によって、キャタピラ式雪上車が動いております。尚長岡市の大原鉄工所や小松製作所で製造している車は本館の特許を使っております。

新潟県はどうして雪が深いか、それにもかかわらず米がつくれるのはどういうわけか、それらの気象を研究するために気象観測もしております。日本海に面し背後に高い山を持つこの国は、冬は北からの冷い風を受けて雪が降りますが、夏は南からの暖かい風の裏となって東京よりは気温が上り、しかも台風の通過をさまたげ、日本中では夏の気象災害が最も少ない米作の安定した国になっております。

本館の気象観測資料は新聞紙上に毎日掲載せられ、一般の利用に供しております。そうしたことから天気相談にもあずかっております。

次に研究を兼ねて社会科の勉強の一つとして新潟県内の小中学校に呼びかけ、雪の深さを測って貰っております。

新潟県は日本一雪が深いといわれておりますが、実際どこにどれだけ雪が積るか、その詳しいことが解っておりませんでした。この国では雪が半年もその生活を支配いたしますので、せめて積雪分布の状態だけでも知らなくては生活は勿論産業に及ぼす影響を知ることとは出来ません。そう思いましてこの調査を県内の小中学校に呼びかけたのであります。幸この呼びかけに応じて県内数百の学校で雪が積りはじめると先生と生徒は毎日雪の深さを調査し、自然研究の勉強をしております。こうして満7ヵ年になりますが、こうしたことから各学校では雪を単位として教えられるようになり、やがてこの国から雪の研究者が続出し、雪国の生活が豊かになるであろう希望を持つようになりました。なおこの調査の結果、雪の降り方、積り方で新しく解ったことが多く、学問的にも貢献するばかりでな

く、政治や産業に貢献する資料になりつつあります。

こうして多数の学校を通じて児童生徒に雪の科学の関心を深めておりますが、本館でも日曜毎に科学教室を開き、自由で楽しい科学の遊びをつづけること、これも満7ヵ年400回以上に及んでおります。

その他講演会や展示会、映写会を開いて広く一般にも呼びかけ社会教育にもつとめております。

なお社会教育の目的で雪国で現在使っている民具を集めて雪との関係を研究し、これを説明することによって先人の工夫に敬意を表し、新しい研究にこれを取入れることの宣伝もしております。過去の経験を活かすことは最も能率的に生活を豊かにする方法であるからであります。ところがこのような研究は民俗学でもあまりなされていたために、その方面の注目をひくようになりました。

このようにして雪国の生活にうるおいのある豊かさを持たすことを目的として努力しておりますが、微力で思い半ばにも及ばないのはまことに申訳ない次第であります。それにもかかわらず本日殿下の御来館をいただき、御激励賜わったことは、まことに光栄であり、感激いたすところであります。なお本館運営の経費は大部分北越製紙株式会社から支出し、長岡市亦之を援助しております。県、及び新潟大学においても陰に陽に之を援助し、大学と表裏一体となって雪国の生活文化の向上に努めております。以上本館の概要を申し上げます。

(3～4頁所収)

【資料Ⅱ－ii】

幼き頃のことども

いつもいつも雪に関する八ヶましいことを述べるのが能でもあるまいから、ここには自分の幼かった頃の雪に関する遊び、或は思い出をすこし述べてみたい。

今でこそ冬の降雪期ともなれば老若男女を問わず極めて颯爽としてスキーで乱舞する壮快な遊びもあるが、吾等子供の時代は勿論中学時代にも未だスキーは知られて居なかった。今から丁度45年前の明治43年、高田の13師団に塙国のレルヒ少佐が来て居てスキー術が伝えられ、それが全国に広まったのであって、私共の之にとりついたのは、骨の硬わばった30才以後であつたので遂に斯道に鍊達する機会は永久に失われた。先ず明治期の雪に関する遊びといえ、初雪が来

るとじきに始められる雪玉のぶっつけ仕合、之は足駄を以て石面に於て雪玉をこね丸め之を半透明体迄締め固め、之を以て敵の玉とぶっつけ合って一挙に勝敗を決めるのであるが、玉を強硬に鍊るには中々技術を要するので各町内にはそれぞれのベテランが居た。

雪が1米も降ると当時の小学校の校庭で雪合戦が行われる。当時はまだ洋服なぞハイカラのものは着ない時分、股引ははいているが足袋ははかない素足のままで校庭に押し出されて軟かい雪の上に飛び込む、両陣に分れて竿を立て、敵竿に昇って敵旗を奪うを以て勝とするのである。素足で雪の中に飛び込んだ暫くの間、の冷たさといったら今思い出してもぞっとする。併しやがて雪球を握って散弾戦に入る頃からは全く寒さも冷たさも忘れて仕舞う。其内に取り組み合が始まって雪中に埋められる場面も出る。やがて敏捷に敵竿にするすると上って敵旗を奪う、誠に快爽な雪中の遊びである。

雪上の沍み渡り、之はまた暖国人の夢想だも出来ない早春の雪国の楽みである。即ち2月下旬から3月上旬ともなつて2米3米の積雪が時には雨を受け、時には早春の陽を受けて段々にしまり雪となり、たまたま夜来温度の急降下を受けて積雪がかんかん固まった快晴の朝、こんなことは一冬に10回位もあろうか。こんな好日には学校は登校と同時に今日は「沍み渡り」と先生から云い渡される。生徒は万才を叫んで東山、悠久山に出掛ける。田もない川もないただ一直線に雪上を快步直行するのである。即ち長い間の陰惨な閉ぢこめられ居たものが、碧空を仰ぎ春光を浴びて自由に飛び廻る解放感と、いつもは田だ川だと、障害があつてきまつた道路しか通れぬものを、自由に一直線に飛躍できる征服感と二つの喜びが重なるのであるから子供の喜びは非常である。かくて山に入って兎の足跡を追跡して之を捕える喜び(兎は山を登るときは到底追いつけないが降るときはころころ転げるので簡単に捕え得る)、之はまことに雪国に恵まれた快味と申すべきである。筆者は一度此好日に学校の「沍み渡り」宣言なきに拘らず、4・50人で構わず此解放感に半日ひたつて充分堪能して正午頃帰校した為、受持先生の大眼玉を食つて罰として夕方迄学校に残されたこともあつたことを記憶する。

昭和28年の1月であつたが、十日町(現十日町市)の雪祭を見物して、各町内の雪を以ての構作物がいかに大規模で且つ芸術味豊かなのに感服したのであつたが、雪のある各停車場では又競つて毎年雪の造り物

を飾つて居られるが、之なども面白い趣向であり、機会を捕えて中央政界人に積雪の現状を紹介したいものである。私が10才頃適々日清戦争が日本の大捷に帰し其凱旋兵を迎える為、今の明治公園の前に又柳原通りに(之は確か軍艦松島の型)市内数ヶ所に大きな雪の造りものが出来たことを記憶する。

十日町で思い出したが、現中山市長が50年か60年振りで故山の十日町に住まれるようになっての感懐に、自分が子供の時国を出た時分と50年を経た今日でも雪から受ける被害の状況も之が克服に対処する方法も殆ど変りがない。たった一つ、極めて簡単な屋根の雪を運ぶ為の沍り坂だけが工夫されただけじゃないかと喝破されたが全く同感である。唯雪上自動車等の発達等、漸く新時代を造りつつあるかと思われるが、降雪の量が極度にへる様の奇蹟でも起らない限り、積雪の生活に及ぼす莫大の損耗、之は避くるべき道はない。政治的に解決する一途あるのみである。雪のあそびを語つつもりが、つい又八ヶましい問題に飛火したからこのへんで筆を結ぼう。

田村 文吉

(3～4頁所収)

【資料Ⅱ－Ⅲ】

財団法人積雪研究会理事長 田村 文吉

昭和24年積雪科学館創設以来、館長として献身的にその本能発揮に努力せられ、裏日本一帯の住民が永劫に、宿命的にさいなまれ苦しめられて来た大雪そのものと取り組み、或は、積雪統計の為各学校に奉仕的援助を仰いで10年間の新潟県内の記録を作ったり、新潟大学工学部先生方の並々ならぬ御協力によって、雪中交通機械の工夫を仰いだり、天気相談所を開いたり、或はまた毎日曜日に附近小中学生を集めて科学する心の集りを持ったり、身も家も忘れて雪の博物館の為に尽された勝谷稔館長が不慮の病の為に入院するの已むなきに至り、病勢はかばかしからぬ為、遂に職を辞して、東京の御宅に帰られる様になったことは誠に遺憾の極みであつた。特に今年は異状の大雪で、政治的にも、社会的にも本館の存在が著しく世間にデビューした大切な時に勝谷さんのたおれられたことは郷土の為、日本の為にも多大な損害である。

併し不幸中の幸にも、前長岡工業高等学校長盛田先生が館長を御引受下され、同じく前の県立長岡工業学

校長森山先生が館員として御援助下さることになり、母体である財団法人積雪研究会の新役員に副知事さん、市長さん、積雪連合の古川さん等が新に加って戴くことにより、館自身も頗る強化されるに至ったことは何よりも嬉しいことである。盛田、森山両先生共裏日本に生れ、宿命的ともいわれる豪雪の被害を生涯体験してこられた立派な科学者であることは私の心強さを倍加するものである。

科学の進歩はこの数十年来暖国の人に顧みられなかった積雪の被害と人心の萎縮とを必ずや解決できるものと思う。幸に本県を始め、裏日本、上信国出身の政治家は、今年の豪雪を契機として、日本の片よった政治を是正すべく立上られた。県市民の方は既に立上っておられる。日本として郷土として慶祝すべきことだ。吾々は此の背後にあって、諸先生方に科学的資料を提供し、此等の運動のあと押しをすべく強力な歩みを進めたいと思う。

今春の豪雪のあとの裏日本は在来の例によってこの冬必ずしも軽雪でないかも知れない。雪と建築・雪と交通、通信・雪と体育、保健・雪と産業等々、吾々の触覚する問題は数限りない。皆さんと一緒に頑張っ

（2頁所収）

Ⅲ 『追憶 覚張治平翁』における追想

『追憶 覚張治平翁』は、1933（昭和8）年12月に、関魚川の編著、岩瀬直蔵により発行された覚張家7代目当主の治平（1862～1927）の追想録である。全214ページにわたる。

治平は、1862（文久2）年10月22日に、覚張家6代目当主治平の次男として生まれた。幼名は儀七と称した。1889（明治22）年の6代目の死去後に襲名および家督を相続した。生活の近代化が進み、書籍や雑誌が急速に普及していくなかで、初代以来の骨董商の廃業と書籍商への専念を決意した。旧友にあたる大橋新太郎（佐平の長男で博文館館主・北越製紙取締役等を歴任）の全面的な支援を受けて事業の拡充を主導し、目黒十郎が率いる目黒書店（鳥十）と並ぶ長岡を代表とする書籍商として成長を遂げ、その名は新潟県内にも広く知られていった。

治平が事業規模のさらなる拡大に向けて着目したのが、文部省により国定教科書共同販売所（社長・大橋新太郎）のもとに1県1ヶ所割り当てられることと

なった小学校の国定教科書の特約販売である。治平は、大橋と意見交換を重ねて、特約販売権を独占することなく、1905（明治38）年に目黒と北蒲原郡水原町の書籍商の西村六平とともに、合資会社北越書館を設立した。その後、目黒と西村とともに、1919（大正8）年に学校用品・事務用品の卸売販売を目的に学用品株式会社、22年に中学校への教科書販売を目的として北盛館株式会社を立ち上げている。この間、1919年には新潟県書籍商組合を創設して、初代組合長に就任した。

治平は、田村文四郎が構想した稲藁を原料に板紙を製造する起業計画に賛意を示し、田村とともに立ち上げに尽力して、1907（明治40）年4月に北越製紙を設立するに至った。治平は常務取締役役に就任して、販売・資金調達および経営管理を担った。一方で、専務取締役に就いた田村は生産・製品開発を担当し、両方で明確に役割を分担していたのは注目に値する。治平は、通常は経費節減を徹底していたが、1924（大正13）年に入社した中村恒（後に副社長等を歴任）に対して「冗費を省き、能率を高める機械設備があれば、決して金を吝んで下さるな」（『追憶』46頁）と厳命するなど、必要に応じて積極的な投資を促し、長岡および新潟・市川工場の新增設や生産設備の増強に取り組んだ。1920（大正9）年に田村が死去した後に、治平は後任の専務に就いて、1927年6月17日に死去するまで経営発展と企業成長をリードしている。

この間、治平は長岡銀行（現・北越銀行）取締役・監査役や北越水力電気（現・北越メタル）監査役、長岡商業会議所副会頭や長岡市議員を務め、地域産業の活性化に寄与した。

治平については、守成的な事業姿勢と温厚篤実な性格が評価されるのが通例で、『追憶』に多数の関係者から寄せられた追悼文も概ねこうした文脈により語られている。これに対して、公私ともに長くかつ深く治平に仕えていた文吉は、旺盛な経営スタンスと剛直ないし生一本なパーソナリティをエピソードとともに強調しており、治平の実像を示すものとして注目に値する（【資料Ⅲ-i】）。

これに関連して、事業姿勢および性格ともに進取的な側面と守成的な側面の両面があり、巧みにバランスをとっていたと指摘したのは田村寅吉である（【資料Ⅲ-ii】）。

寅吉は、1881（明治14）年に文四郎の次男として生まれた。文吉の兄にあたる。1909（明治42）年に分家して、長岡市観光院町で「田村分店」との商号で紙卸

商を開業した。寅吉は商才ないし才覚に富んでおり、洋式帳簿や和式の鼠封筒等の商品開発をはじめ、文房具や雑貨の卸売業、キリンビールや損害保険の代理店業、さらに印刷業にも進出している。1941（昭和16）年に新潟県ノート販売株式会社へ改組を遂げた。同年末に生涯を閉じている。

この間、長岡市紙業組合長や長岡実業協会役員、長岡商工会議所議員等も歴任した。

寅吉は長岡市政にも参画し、1920年6月に長岡市会議員となり、25年6月から副議長、28年6月から32年6月まで第8代目の議長を務めた。また、青年期から消防に関心をもち、東京で斯界の有力者であった松井茂の下で学び、長岡市消防組頭を長らく務めている。寅吉の忠実かつ勤勉な人柄と真摯な姿勢は広く尊敬を集めたのである。

【資料Ⅲ－i】

平凡で非凡であつた覚張翁 田村 文吉氏談

私が始めて翁をお知りしたのは明治四十年頃、私の遊学時代に丁度北越製紙の当時にあつて、翁は私の父と一しょに日本橋の樋口屋に宿つて、いつも儉約の二人は夜は樋口屋の定飯で、煙管煙草で晩酌を一本又は二本と美味しそうに杯を重ねて、上機嫌で居られた事を記憶して居る。其内に私が大正四年北越製紙に入社するやうになつてから同十四年迄十年間、日夕会社で机を並べて翁の薫陶を受けていたわけであるが、翁逝いて既に七年、社業幸に今日の盛を見るにつけ会社の創業時代、欧州戦後の財界波瀾時に於ける当局であつた翁の苦心経営が偲ばれるのである。

或年の夏、会社の社員が翁に率ゐられて鯨波から柏崎へと清遊を試みた事があつた。帰途柏崎で汽車に乗る時一人の新しい高商出の社員が、時間が少なかつた為か、一杯機嫌に乗じて跨線橋を渡らないで線路を横断して乗車した。翁は帰社されると其日御伴の出来なかつた私に、あの男の様な社会の約束、公けの規則を知つて無視する者は到底見込みがないと、滅多に他を非難した事のない温厚寡言の翁が、其日に限つて声を激しく非難されたのであつた。其時私はいろいろ本人の為め執成したのであつたが、其後度々粗暴の行為があつて周囲の嫌はれものとなり、遂に自分から会社をやめるに至つた事があつた。之は一些事であるが翁は斯様の点頗る几帳面であつて自分はいつも小形の手帖

を携へ、会社の要件は綿密に、正確に記入し、事計数に関しては一銭一厘も忽にせず、又公私の別は頗るはつきりとし苟も他の信頼を裏切る様の事はなかつた。

翁、一分は至つて質素儉約で又道徳堅固であられたが、人を待つ寛宏の長者であつた。晩年病気の為め禁酒される迄は酒を嗜まれ、量も相当のものであつたが、之が為め乱に流れたり又は耽溺される様の事はなかつた。所謂陶然として上機嫌になり、稀には翁唯一無二の電車節「皆さんお揃ひでようこそお出で」の一曲を、それも翁独特の節廻しで唱はれる位のものであつた。夏になるといつも洗ひ晒しの木綿の蚊飛白に角帯を締め、再興だらけの足袋を穿き、頭には三年越しのパナマ帽を冠ぶり、郵船会社で贈つて呉れた古風な日本航路の図の扇子を片手に、細竹の杖を曳き稍腰を折つて会社へ出勤せられた姿が未だに目に見える様である。併し翁は一分は儉約であつたが、事業上の事では一文惜みをする人ではなかつた。又公共の寄付金等断じて人後に落つるものではなく、話があれば必ず相当の寄付をして居られた。只自己の分限を鑑み、余りお先棒になつて名を求め又は一時の快を叫ぶ底の事はなかつた。其責任感の強いものがあつたと思ふ。何事を決するにも沈思熟考、細心の注意と努力を払はれたが、一度決すると、其結果がよくても悪くても愚痴も言はず自慢もせず、譚底月痕を残さずであつた。

翁は比較的富裕の家に生れた為め其生涯も坦々平凡の様に見えるけれども、其謹直にして言行に我侪のなかつた事等常人の及ばざる所であると思ふ。宜なり、之に由つて社会的に信認を得、或は公務に画し又は事業に貢献すると共に一面には粒々細を積みて家産の大を成し、一門和合子孫繁昌の基を致されたのであるが、此様の型の人が段々此長岡に少くなるのは心細い様な感じがする。

(112～114頁所収)

【資料Ⅲ－ii】

翁は積極と消極の間を行く 田村 寅吉氏談

覚張治平翁の人格は、一枚の紙でも、一本の鉛筆でも、むだにしない。要件は必ず扣へをとつて置くに尽きる、と思つてゐる。

それから己れを待つ非常に薄い方でもあられた。どこまでも儉素であられたのだ。私が或る時、たしか明治四十年頃のこと、覚えてゐるが、信州、甲州から東

京へ出たことがあつた。偶ま翁も出京されてゐたので、お宿の樋口屋に訪問してみると、どうでせう長岡の富豪治平翁の服装なるものは、節織銘仙に襦袢は真岡、袖だけは縮緬がつけられてあつたが、それだつて洗ひ晒らしたものに過ぎなかつた。その頃は成金横行時代であつて長岡の金持ちとしても、紳士としてもこんなに質素な服装、まことに稀れなことであつた。それを翁は平気でやられてをつたのである。こんな風に儉素な翁も、一夕鈴木久五郎君－その頃株で大儲けして一躍千万長者となつた、大実業家とも呼ばれ、相当天下に名を馳せた成金英雄－東京で酌んで、長岡人を耻かしめなかつたといふ話が今でも残つてゐる。

翁の意気、人意を強うさせるものゝあつたのを喜ぶたい。

翁は市政にも忠実なものであつた。典型的な市民の公僕といったら翁の如きをいふべきであらう。市会から籍を脱せらるゝ、即ち議員を辞めらるゝ四、五年前からは翁は断然党派に偏することをしなかつたのである。どこまでも厳正に、どこまでも不偏に、党派超越、只々至誠を傾けての奉公に専念、精進された如くにあつた。この生真面目さ、几帳面さは翁人格の全貌を語るものだともいへる。

繰返へしていふが治平翁は儉素の方であられた。むだをしない人でもあられた。こんな話もあつた。翁は令弟半四郎君を東京の学校へ入学させるのだといつて、同伴信越線を上京されたことがあつた。その頃の信越線といふのはまだ北越鉄道であつた頃で、直江津までを北越鉄道で行き、そこで所謂信越線といふのに乗り替へるのであつた。翁は何時もの如く赤毛布持参の赤切符。そこへ偶ま乗り合はせてゐたのが私ども親子であつた。私どもは商用で信州辺まで行くのであつたが、勿論赤切符で、二三月春まだ浅く雪もチラついてゐるといふに、その頃の北越鉄道にはスチームの設備など十分でなく、うちの親爺の如き真綿で作つた綿帽子といふのを顚頂にいたゝき、ブルブル慄ひながら寒さを凌いでゐたものである。その時私はシミジミ考へさせられたのであつた。治平翁の儉素、乃父も亦それに遜らざる儉素の親玉、儉素両巨頭の揃ひも揃つての存在は、どれ位わが長岡にとつて力強きものであるかを、思つたのであつた。こは決して自画自賛ではないのである。長岡人は堅忍克己だ。よく働く、儉素で済ませる。といつたところでそれだつて、戊辰の戦乱に全街焦土に帰した長岡は、老弱は溝壑に転じ、壮者は散じて四方に之くといつたやうな、悲惨の状態に

あつたので自然、発奮生きて行かねばならぬとしての儉素となり、よく働くことゝもなり、堅忍克己であらねばならぬことでもあつたのだらう。

翁にも亦趣味の半面はあられた。骨董趣味がそれで、だがこれにだつて千金を投じて馬骨を買ふ、そんなむだなことはしなかつた方である。翁には相当の鑑識があられた。教へても教へられないといつたやうな鑑賞眼を有してをられたところから、時々掘出しものをされる。よつて翁の家にはいゝ物が珍藏されてゐる。当主亦書画骨董に趣味を有し鑑識も高いといはれてゐる。が、如何にも当主の人格には一種の気高さを持つてゐる。何事に対しても野心がない野望といふのを持つてゐない。それに自制心のおそろしく強いものがある。私はそこに絶大の強味があるとしたいのだ。あれだけの産を擁してをる。力で行く、金力で行く、なさんと欲するのはたいていはなし得るであらうのに当主はそれをされない。矢張り父君の血をうけ継がれたのであらう。学校教育だけでは一寸望まれない人格陶冶が、不知不識の間に父君の志を襲いで孤高超然、只々家業に精励されてゐるところに当主の尊さが存する。

世間ではよく治平翁と、乃父の文四郎先人をとらへて一は進取的、一は守成的であるとなし、恰も積極と、消極との両極端の如くにいつてゐるものもあるとのことだが、乃父のことはともかく、治平翁の月旦に至つてはよほどの見当違ひをしてをると、私だけは思つてゐる。治平翁は消極、保守どころか存外積極的で、進取的の一面も有せられた。一時熱心に紡績事業を長岡へ興さうと企てられたる如き、その好事例の一つとしたいが、どつちかといふと翁は多く積極と、消極の中間を行かうとしてをられたといふのが、蓋し妥当の看方であらう。人も出せおれも出す、人も働けおれも働く、積極でもなく消極でもなくその中正を行く、これが翁本来の態度であつたらうし、また翁は表面に立つて時功に誇る、そんなことは大嫌ひの方であつたらしく、現に高工創立の時にしても表面、飛んで歩いての運動こそしなかつたが、衷心切々これが設立は願望してゐたなどに徴しても、およそ知るを得べく、また翁は貨殖に妙を得られてゐた。理財にも長じてゐられたのであつた。

人は翁を、平凡と見るかは知らないが私はさうは見ない。北陸四県、東北六県で一二を争ふ書肆、押しも押されぬ本屋として今日覇を唱へてゐる、それには翁の非凡の才に負ふところのものが、少なくあるまい。翁は如何にも思慮慎密だ。思慮慎密なるが故に、保守

だ、消極だ、引込み思案だとして翁を片付けやうとするは、翁を殺すにも等しい。翁の人格は決して決してそんなものではなかつたのである。

(109～112頁所収)

小括ー今後に向けてー

本稿で取り上げた資料からも、田村文吉の堅実かつ緻密な企業者活動やキャラクターないしパーソナリティ、さらに雪害という地域の大きな課題の解決とこれに関連した教育・文化への貢献への熱心かつ真摯な姿勢の一端を垣間見ることができたと思われる。

今後は、【資料Ⅰ】でも文吉が述べていた、板紙業界の企業間競争の実態と協調に向けての諸活動および1930年代後半以降の戦時体制が進展するなかでのパルプ事業への進出やファイバー事業の拡充などについて、立ち入って調査を進めていくこととしたい。

【付記】

本稿は、本学が平成25年度に文部科学省から「地（知）の拠点整備事業」として採択された『長岡地域＜創造人材＞養成プログラム』の取り組みの中の26年度の「地域志向教育研究」におけるテーマ「地域企業の経営発展と企業成長および企業者活動についての研究ー北越紀州製紙のケースー」による成果の一部である。

【謝辞】

本研究をすすめるにあたり、北越紀州製紙株式会社で常勤監査役などを歴任された小林多加志氏、人事部長の金川貴宣氏をはじめ同社関係者の方々には資料提供および調査で一方ならぬ御配慮を頂いている。また、株式会社田村商店代表取締役会長で田村文吉の甥にあたる田村巖氏には、紙卸売業および製紙業界の歴史と現状についてさらに文吉に関する貴重なエピソードを御教示頂いている。特記して感謝申し上げる次第である。

末筆となるが、資料整理等に御協力頂いた本学地域連携研究センターの近藤瑞恵さんにも改めて感謝申し上げますこととしたい。